

佐倉藩校における初等教育

——東塾・西塾を中心に——

外山 信司^[1], 高野 良子^[2]

[1] 千葉県立四街道高等学校 (本学高大連携校), [2] 植草学園大学発達教育学部

藩校は藩士の子弟のために諸藩が設立した学校で、私塾・寺子屋とともに近世の教育を担った。明治維新後の近代化と教育の発展は近世に培われたが、教育改革が課題となる中、教育の原点とも言うべき近世の教育について明らかにすることは意義があろう。

下総佐倉藩の藩校は1792(寛政4)年、堀田正順^{ほった まさあり}によって創設された。さらに堀田正睦^{まさよし}は藩政改革の一環として藩校を拡充し、「成徳書院」と改めた。朱子学と武芸を根幹とした教育が行われ、蘭学・英学などの洋学が積極的に取り入れられた。しかし、藩校は15歳から24歳までの藩士子弟が就学するのに対し、その前段階の教育については、従来の藩校研究、教育史及び地域史研究においても成徳書院に付随して概要が述べられるにとどまっていた。

そこで、本論考では8歳から14歳までの藩士子弟が学ぶ教育機関であった東塾・西塾を中心に史資料「両塾諸生心得書」を読み解き、佐倉藩を例に藩校の初等段階での教育がどのように展開されたかについて述べる。

キーワード：藩校、初等教育、成徳書院、佐倉藩、近世の教育

1. 問題の所在

近代の教育は、その源流を探れば江戸時代に遡り、近世の文化と教育を基盤とし、その伝統の上に成立したものといえよう。明治維新後において、我が国の近代化が急速に進められ、高度な近代社会を成立させることができたことについても、その背後に幕末において、我が国の文化と教育が高い水準に達していたことを見落とすことができない¹⁾。その意味において、江戸時代、特に幕末の教育について考察しておくことが必要であろう。

本論考は8歳から14歳までの藩士子弟が学ぶ教育機関であった東塾・西塾を中心に「両塾諸生心得書」を読み解き、下総佐倉藩を例に、藩校の初等教育について述べる。

1872(明治5)年に学制が發布されるまでの日本の教育機関は大きく次の三つに分かれていた。それらは、庶民が子弟のために読み書きなどを学ばせた寺子屋、武家の子弟のために幕府が設立した学校やそれぞれの藩が領内に設けた藩校、漢学・国学・洋学の専門の学者が開いた私塾などであった。武家の学校の中心的役割を果たしたのが江戸に設けた昌平坂学問所であり、諸藩も城下町に藩校を設け、領内各地に郷学を開設している。

藩校とは²⁾、江戸時代からそれに続く藩制時代の1871(明治4)年までの間に、藩士の教育のために、藩が公的に組織し、公費で維持・運営した学校であり、藩学と呼ばれることもある。江戸時代初期からの伝統的な教育を担った学校といえることができる。

本論で焦点を当てる下総佐倉藩は、近世初頭の

1610（慶長 15）年に小見川（千葉県香取市）から移封された土井利勝が、近世城郭としての佐倉城（佐倉市）を築城し、城下町を整備したことに始まる譜代藩である。以後、藩主は石川・松平（形原）・堀田・松平（大給）・大久保・戸田・稲葉・松平（大給）と交代したが、堀田正亮が 1746（延享 3）年に出羽国山形（山形県）から入った後は、正順・正時・正愛・正睦・正倫と堀田家が続き、明治維新を迎えた。幕末期の石高は十一万石余であったが、柏倉陣屋（山形市）を中心とする山形領四万石などの飛び地も含まれた。

藩校は 1792（寛政 4）年、堀田正順によって創設された。当初は単に「学問所」もしくは「学校」と呼ばれたが、1805（文化 2）年には「温故堂」と称された。堀田正時は 1808（文化 5）年に扁額「温故堂」を揮毫している。

堀田正睦は 1833（天保 4）年に藩政改革を宣言し、文武の振興を図って「文武芸術の制」を定めた。さらに従来 of 藩校を拡充して「成徳書院」と改め、佐倉城追手門外に本校である書院と演武場を新築した。佐倉の成徳書院が開学したのは 1836（天保 7）年であった。ちなみに書院とは、南宋の朱子が開いた白鹿洞書院（中国江西省廬山）、朝鮮の陶山書院（韓国慶尚北道安東）のように、東アジアでは学校という意味を有した。

成徳書院では朱子学と武芸を根幹とした教育が行われたが、「蘭癖」と言われるほどの開明藩主で、幕府の老中上座・外国事務取扱として日米修好通商条約の交渉を担当した堀田正睦の先見性もあって、蘭学・英学をはじめとする洋学が積極的に取り入れられた。特に蘭医学は有名である^{注1}。藩校の後身である千葉県立佐倉高等学校には一万冊以上の藩校蔵書（千葉県指定有形文化財「鹿山文庫関係資料」）が残され、最初の蘭和辞典として知られる『ハルマ和解』や多くの蘭書をはじめ、英書・仏書・独書といった洋書を見ることができる³⁾。

このような成徳書院での教育については、近世教育史や洋学史、地域史の方面から研究が行われてき

た⁴⁾。幕末維新期に日本の近代化に貢献した人物を輩出したことと相俟って、特色ある藩校として知られている。しかし、藩校は 15 歳（数え）から 24 歳までの藩士子弟、現代で言えば中学 3 年生から大学生にほぼ相当する者が就学するのに対し、その前段階の初等段階の教育については概要が述べられるにとどまっている。

2. 目的と方法

安房・上総・下総（現在の茨城県域も含む）からなる房総三国には、1867（慶応 3）年 10 月の大政奉還の時点で 18 にのぼる藩が存在した。さらに徳川宗家の駿府（静岡市）移封によって駿河・遠江にあった 7 藩が安房・上総に移され、1870（明治 3）年には下野高德藩（日光市）が下総に移って曾我野藩（千葉市中央区）となった。翌 1871 年 7 月の廃藩置県の段階では 24 藩に達したのである^{注2}。このうち藩校を設けたことが確認できないのは、わずかに小見川藩（香取市）と曾我野藩の 2 藩のみである。幕末維新期に藩校を通じた武士階級への教育が急速に普及したことがわかる。

これらの藩校は、藩の儒者の家塾を収公した程度のもので、あたかも大学のように整然とした組織を持つものまで、その規模は大小さまざまであった。教育内容についても、朱子学や折衷学といった儒学を中心とする漢学をはじめ、国学、洋学、算学などに及んだとされる。

しかし、藩校の組織や教授内容についての史資料が残されている例は少なく、あっても断片的なものや後に編纂された簡単なものがほとんどである。このため教育の実態については明らかになっていない。また、藩校は中等・高等段階の教育機関であったため、初等段階での教育については不明である。

これに対して、佐倉藩では、成徳書院へ入学する前の 8 歳から 14 歳までの藩士子弟が学ぶ東塾・西塾が設けられていた。初等教育機関の存在がわかるのは、房総の藩校としては希有な例と言えよう。し

かし、その教育については、組織の面から成徳書院に付随して紹介されるにとどまってきた。

そこで本論考では、房総における代表的な藩校として成徳書院を取り上げ、東塾・西塾に関する史資料「両塾諸生心得書」を紹介しつつ、佐倉藩を例に藩校の初等教育について述べることにする。

3. 東塾・西塾の位置づけ

成徳書院の組織を示すものとして「成徳書院職掌記」がある。これは「書院銘目」[図1]及び「職名位次」[図2]と題される二種類からなるが、前者は藩校全体の組織図で、後者は教職員の配置と職位を示した図である⁵⁾。

組織の面から最盛期の成徳書院をみると、儒学の祖孔子を祀る先聖殿、儒学を学ぶ温故堂、文庫などと礼節・音楽・書学・数学などを教授する六芸所が内附属とされ、これらが本体を構成していた。

これに加えて外附属があった。南庠は、江戸湾(東京湾)の海防のために千葉に駐留する藩士の子弟のための分校であった。北庠は、佐倉藩最大の飛び地領であった山形四万石を支配するために置かれた柏倉陣屋に勤務する藩士の子弟のための分校であった。佐倉から離れた場所にあった南庠・北庠は、それぞれ附属として礼節・書学・数学と演武小場を持ち、ミニ成徳書院というべき内容を備えていた。

演武場は、兵学・弓術・馬術・刀術(剣術)・槍術・柔術・砲術・水術(水泳)といった武芸を教授する場であった。医学所は、いうまでもなく医学を教授する所で、薬園(薬草園)が附属していた。

東塾・西塾は、礼節・書学を附属としていた。

教職員の配置からみると、成徳書院総裁、すなわち学問所奉行のもとに、部署ごとに教授、付教(准教授)、都講(講師)、授読といった職位があり、生

徒側にも学生、生長、素読生といった階梯があったことがわかる。授読には正授読と佐授読との区別があった。「正授読は位次、都講に准ず」とあって、都講に準じたようである。南庠・北庠や医学所といった大きな部署には、教授の上に総管が置かれていた。また、六芸所・演武場には師範の下に員長が置かれ、生徒は六芸生・武芸生と呼ばれたが、目録(免許)の有無で区別されていた。

東塾・西塾では、それぞれ長(塾長、定員1名)が置かれ、温故堂の都講が兼ねたが、「一塾の長たる上は子弟の訓導を専とすべし」とされた。その下に授読が置かれ、成徳書院と同様に正授読と佐授読との区別があった。「正授読は位次、長に准ず」とあって、長の次席に位置づけられたようである。正授読は1名、佐授読は3名が定員であった³⁾。塾生には生長、素読生といった階梯があった。

事務を担当する職員としては、成徳書院管務、つまり学問所肝煎のもとに、部署ごとに執事が置かれた。温故堂や南庠・北庠・医学所には当直を担当する勤番や鍵を預かる定番、学校技能員に当たる下番という施設管理のための職員なども配置された。

また、藩校といえども武士の組織なので、総裁・管務とは別に監察、すなわち学問所目付が置かれて監視の任に当たった。その下には監察を助ける小察と出席簿を管理して席次等を吟味する主簿が置かれた⁴⁾。

このように成徳書院は現代の大学に相当するような整然とした組織を備えた大規模な教育機関であったことがわかる。なお、藩士の子弟のほかに庶民の入学も許したとされる⁵⁾。

以上のことから、東塾・西塾は成徳書院の外附属であり、教員としては塾長の下に正授読と佐授読が置かれ、塾生にはリーダー的な生長と一般の生徒である素読生の区別があったことがわかる。

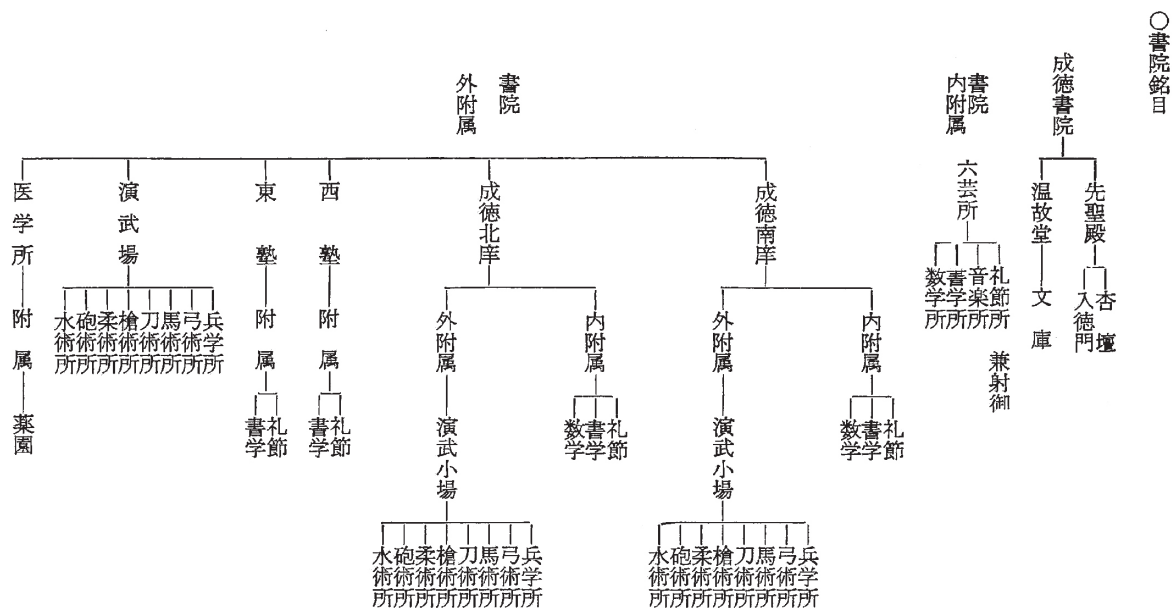


図1 成徳書院職掌記 書院名目

(『佐倉市史 巻二』佐倉市, 1973, p. 875)

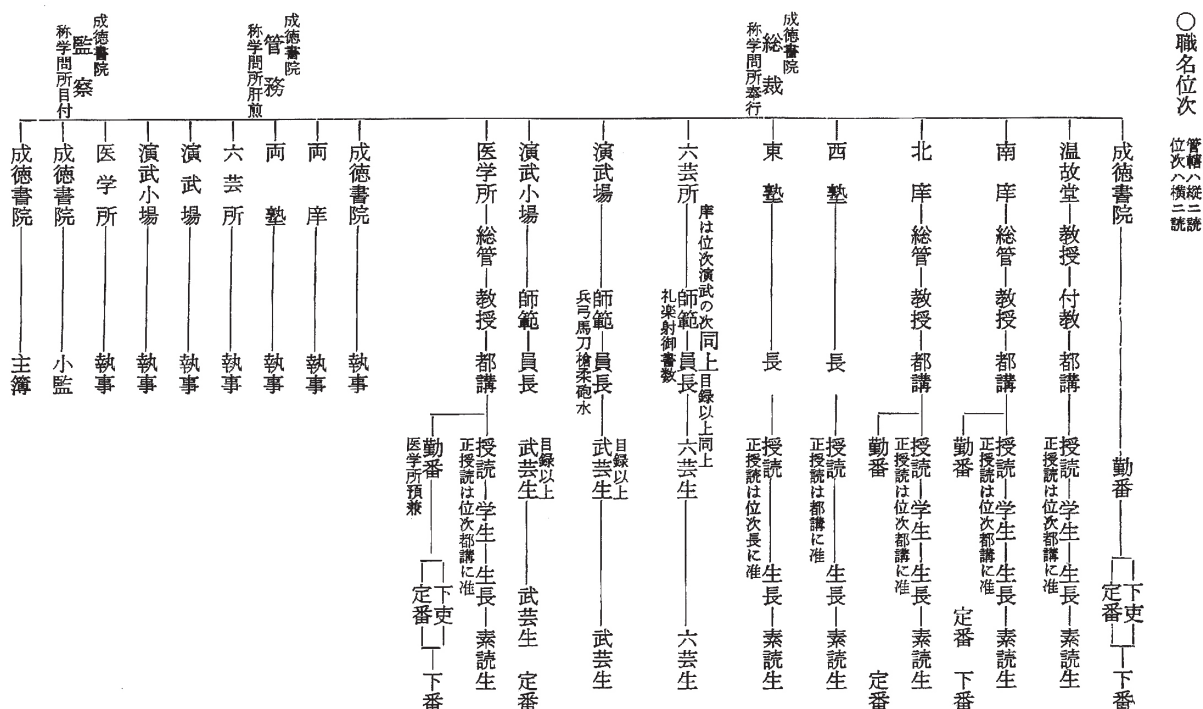


図2 成徳書院職掌記 職名位次

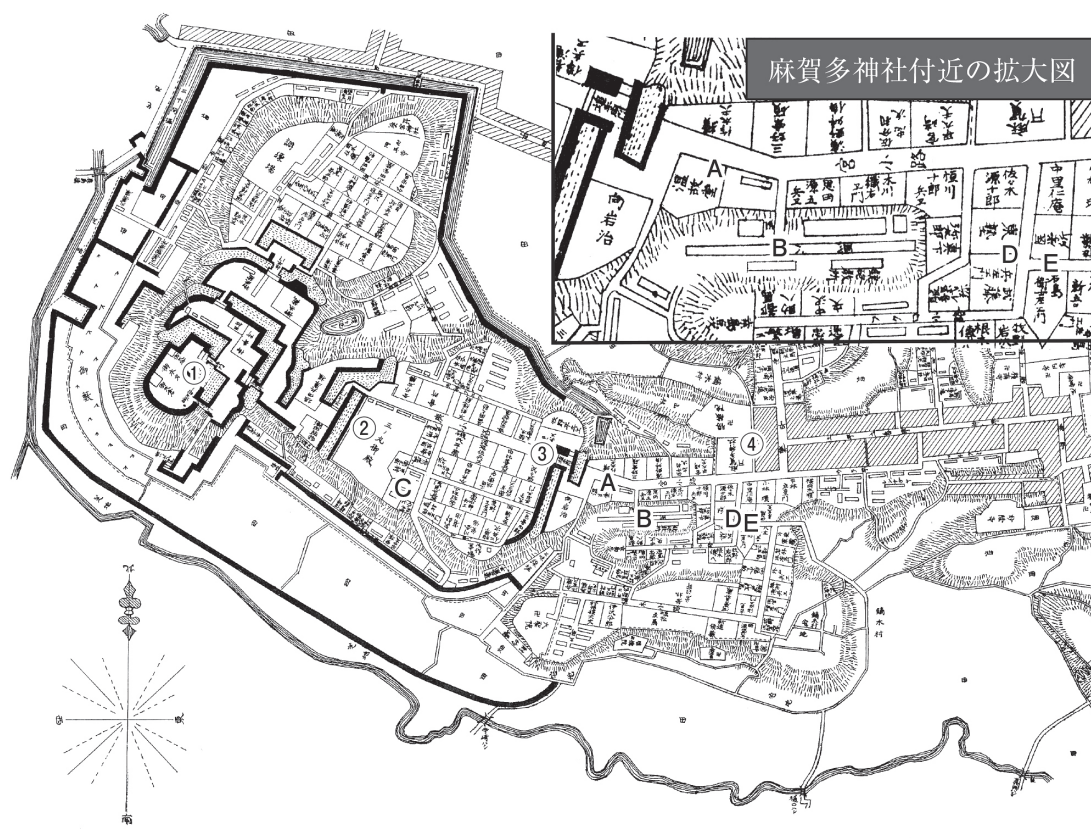
(『佐倉市史 巻二』佐倉市, 1973, p. 876)

4. 東塾・西塾の設立

成徳書院の外附属であった東塾・西塾は、「御家中子供読書稽古」のため、成徳書院の2年前の1808（天保5）年5月2日に設立された。西塾は佐倉城内の三ノ丸御殿の長屋（佐倉市城内町）に設けられ、河内駒之助・長岡芳次郎が「読書世話」を行った。東塾は城外の海隣寺曲輪の屋敷（佐倉市海隣寺町）に設けられ、兼松繁蔵・今野勝蔵が「読書世話」を行った^{注6}。同年11月には宮田作馬・小出又左衛門がそれぞれの「手跡師範」となり、手習いの指導に当たった^{注7}。儒学の基礎的な書籍の素読と手習い、武士として身に着けるべき礼節が教育内容であったと考えられる。授読は文字通り読書の基礎である素読を授けたのである。

藩士の子弟は、その居住地によっていずれかの塾に通うこととなったが、就学状況は振るわなかったようである。藩は、藩士の次三男まで、8歳以上になれば最寄りの読書稽古所へ差し出すよう命じてあるが、いまだ就学しない者も多いので早く差し出すこと、書物等に差し支える者には貸与すること、病身等で就学できない者は申告すること、両塾・温故堂へ出ている者については大目付に報告することを触れている⁶⁾。なお、両塾が「読書稽古所」と呼ばれているが、その教育内容をよく表している。

城内、すなわち追手門内にあった武家屋敷に居住する藩士の子弟は西塾に学び、城外にある武家屋敷に居住する藩士の子弟と一般の子弟は東塾に学んだとされるが^{注8}、後に東塾は宮小路の麻賀多神社前に移った〔地図〕。



- ① 本丸，② 三ノ丸御殿，③ 追手門，④ 麻賀多神社，A 成徳書院（温故堂），B 演武場，C 西塾，D 東塾，E 医学所

〔地図〕「佐倉御城実測図」1859（安政6）年測量

（熊田葦城『佐倉史談』1917年，）国書刊行会，1986年復刊の付図に加筆）

5. 両塾諸生心得書

前章までに述べたことは東塾・西塾の概要であり、教育の実際についてはほとんど知られていなかった。

ところで、文部省が1883（明治16）年に編纂を開始した『日本教育史資料』（史料9冊・附図2帙）のうち第1冊（1890・明治23年刊行）の「巻二 東海道」には佐倉藩の学制に関する資料が収載されている^{注9}。他藩に比して極めて豊富かつ詳細な内容となっているが^{注10}、これは文部省において『日本教育史資料』の編纂を担当した藤井善言^{ふじい ぜんげん}が佐倉藩の出身であり^{注11}、佐倉藩関係者の全面的な協力があつたためと考えられる。「旧佐倉藩学制」の冒頭には、1881（明治14）年5月4日付けの「旧藩学政ノ儀ニ付旧大参事平野知秋ヨリ家令依田柴浦へ回答書」が掲げられている。これによって幕末維新期の佐倉藩を主導し、大参事を務めた平野知秋から旧藩主堀田家の家令であった依田柴浦へ回答があり^{注12}、これが「旧藩主取調」として文部省へ報告されたことがわかる。佐倉藩の中核にあつた人物が収集した資料であり、現在では散逸した貴重なものを含み、高い信頼性と価値を有するものである。

この中に1841（天保12）年3月付けで東塾・西塾書學員長から出された、25条からなる「両塾諸生心得書」が掲載されている。現在、原本の所在を確認することができないが、東塾・西塾の実態を知ることができる貴重な資料なので、大まかな内容ごとにすべての条文を紹介し、適宜解説を加えていきたい。（原文は漢文混じりの候文のため試みとして読み下しとし、読みやすさを考慮して句読点や濁点等を付した。また漢字は常用漢字に改めた）。〔補注〕

（1）総則・学齢・入学

- 一 両塾に於いて読書・礼節・書学修業致すべき旨、仰せ出だされ候儀、重き御趣意これ有る事に付き、厚く相心得られ、成徳書院^{（成）}え仰せ出だされ候儀並びに師伝^{いささ}を守り、聊かも怠慢無く丹

精を尽くさるべき事。附けたり、成徳書院も同様の御場所、塾長は勿論、授業の者尊敬致さるべく候事。（第1条。各条に番号は付されていないが、便宜上付した。以下同様。）

- 一 御定の通り八才より十四才迄塾中^{（ママ）}におひて修業、十五才にて升堂の事。（第2条）

- 一 入門の節、袴着用の事。但し前日学問所三役は勿論、塾長並びに員長宅え親兄弟等召し連れられ候事。（第3条）

東塾・西塾の目的は、藩校での教育の基礎となる読書・礼節・書学の修業であつた。その重要な意義をよく心得て、師を敬ってその教えを守り、学業に精励するものとされた。両塾は成徳書院の附属機関なので、成徳書院の学則や規定が適用された。

数え8歳になると入塾し、14歳まで学んだが、15歳になると塾での学びを終えて成徳書院本体（温故堂）に進んだ。これを「升堂^{しょうどう}」と言った。ちなみに幕府の昌平坂学問所でも入学を升堂と言っている。

入塾の前日には、成徳書院三役（総裁・管務・監察）や塾長・員長のもとへ親兄弟が連れて挨拶に伺った。当日には礼装として袴を着用することになっていた。

（2）学事暦

- 一 毎年正月十四日開業、平日の通り五時^{いつつどき}、揃いて袴着用の事。（第4条）

- 一 十二月十五日終業の事。附けたり、袴着用いたし申すべし。御定の年齢にて翌春升堂の面々は員長へ向ひ厚く礼を述べ、相弟子中えも是迄厚意を受け候段、相互に挨拶に及び申さるべく候事。（第5条）

- 一 休業左の通り。毎月二日・十六日・二十五日、春秋^{せきてん}積奠^{せきてん} 習礼より当日迄、温故堂読書並びに礼節所試業の節、二月初午、五節句、土用中、七月十二日より十六日迄、御書籍虫干し中読書計り、暑寒の入り、九月十四日・十五日鎮守祭礼、右の外臨時休業は員長より相触れ申すべき事。（第6条）

始業が1月14日で、終業は12月15日であった。始業・終業の際は袴を着用した礼装であった。升堂する者は員長にお礼を述べ、世話になった同級生にも挨拶した。

定例の休業は、毎月2日・16日・25日の三日のほか、孔子を祀る典礼で春と秋に行われた積奠⁷⁾、温故堂・礼節所の試業(試験)の時、初午・節句(1月7日の人日、3月3日の上巳、5月5日の端午、7月7日の七夕、9月9日の重陽)や盂蘭盆などの季節の行事、佐倉城下の鎮守麻賀多神社の祭礼などであった。臨時休業は員長から連絡があった。

(3) 日課

- 一 御定の通り毎朝五時より八時迄修業の事。附けたり、出席遅刻相成らざる様、心掛けらるべく候。員長見計り、昼前一度つゝ休息の事。尤も休み中たりとも、戯れ・悪遊び・高笑・高咄・告口・差出^{さしでがまし}ケ間敷き儀、相慎み申すべき事。(第7条)

朝は五つ時(午前7時頃)から始まり、昼の八つ時(午後2時頃)まで学習が行われ、遅刻は厳禁であった。昼前に休憩があったが、休憩中でも悪戯、大声での笑いや話、告げ口、差し出がましい行為は慎むべきものとされた。

(4) 欠席・遅刻・早退

- 一 病気又は拠^{きつと}んどころ無き用向きにて三日相休み候はゞ、宅より急度其の段員長え相断り申さるべく候。一日、或いは二日の休みにても最寄りの相弟子を以て員長え申し越さるべく候。用向きこれ有る遅刻の節もその趣員長へ申し述べらるべく候。拠^{きつと}んどころ無き儀にて早仕舞にいたし度候節は、宅より趣意書付持参の事。(第8条)

三日間欠席した場合は家庭から直接に員長へ届け、一日や二日の場合でも近隣の塾生を通じて連絡させた。用事のための遅刻も届けさせ、早退の際は理由を記した書き付けを提出させた。出席に大変厳しかったようである。

(5) 定期試験

- 一 毎年五月中一度、温故堂におひて試業の事。尤も平生の衣服にて苦しからず、花麗^(華)の服、堅く無用の事。(第9条)

年に一度、5月に温故堂で試験が行われた。受験の際も平服でよしとされ、華美な服装は禁止されていた。

(6) 書学

- 一 毎年二月、八月、十一月中一度つゝ成徳書院書学所において席書いたし候ふ事。附けたり、試業席書とも多人数の事故、行儀正敷^{ただし}く騒がしからざる様、相嗜み申すべき事。(第10条)
- 一 清書、三・八の日御定の事。但し、右日限延ばし候儀無用、面々出精にて繁々清書いたし候とも、勝手次第に候得ども、熟習も致さず認め候は無用の事。(第11条)
- 一 毎月一度つゝ清書老中え御披見候事。但し、三・八の日見合わせ相認め、毎月十五日限り員長え差出し申すべし。席書御覧に入れ候節は、平日の清書は差出さず候ふ事。(第12条)
- 一 手本並びに清書の加毫を簞と見競い、誠実に習ふべき事。文字・草紙数多く習ふとも乱筆・早書いたし候ては詮無き事に候。附けたり、他人の手本え墨のはねざる様、気を付け申さるべく候。(第13条)

書学(手習い・書道)に関する条文は四条に上り、学問の基礎としての書が最も重視されていたようである。2月・8月・11月の年3回、成徳書院の書学所で席書、つまり作品の展覧が行われた。清書を3と8が付く日、つまり月6回提出させた。月に1回は老中(年寄のことか)へ披露したが、その時は15日に提出させた。席書を御覧になる場合も普段のように清書は提出しなかった。手本や師の加筆をよく見て、丁寧にじっくりと習得することが求められ、乱筆や早く書くことは戒められた。他人の手本に墨を付けないように気をつけよという文言は、初学者への注意として微笑ましい。

(7) 礼儀

- 一 塾並びに居宅の出入り、礼義を正し猥りに成

らざる様、心掛けらるべく候事。附けたり、両親の前え出で辞宜いたし、手本、その外入用の品、取落し申さず候様、心掛け、出宅致さるべく候。帰宅の節も同様に相心得、唯今帰り候段、申し述ぶるべく出入りし、両親居り合ひ申さず候はゞ、兄弟等其の席に居り合ひ候人々え右の趣厚く申し述べらるべく候。修業を申し立つる幼年の者、相応日用の勤め疎かにいたし申す間敷く候。塾出入りの節並びに員長え向ひ、宅にて出入りも同様、進退静かに心掛け申さるべし。相弟子中の内、生長えは別段挨拶に及び申さるべき事。(第14条)

- 一 諸向より見廻りこれ有るの節、失礼なき様、急度相慎み申さるべき事。(第17条)
- 一 猥りに立居いたすべからず、塾入口より外へ抛んどころ無き儀にて出で候はゞ、その段員長え相断り申さるべく候。座席込み合ひ候間、机その外え障り申さず候様、心付け申さるべく候。履物等に至る迄混雑これ無き様、致さるべき事。(第21条)
- 一 退座の節、世話人日々帳面を以て呼び上げ候はゞ員長え辞宜、其の外相弟子えも挨拶、静かに退散、道寄り等一切無用の事。(第24条)

武士の子弟の基礎的教育機関である以上、礼儀や挨拶、配慮が重視されるのも当然である。塾や員長宅へも静かに出入りし、諸方面からの視察の際に失礼がないように心掛けたり、混雑時にも場に応じた気配りが求められた。登校時の両親への挨拶の際に手本や学用品を落とさぬようになど、懇切丁寧な注意がある。就学したばかりの幼年者には、登校渋りのような行動がみられたようである。塾生の中でもリーダーとされた生長には挨拶が必要であった。塾からは世話人の呼名の後に挨拶して静かに退出し、寄り道をする事は禁止されていた。

(8)「手あらき儀」の禁止

- 一 師役並びに生長は申すに及ばず、高弟等申し合せ候儀、相背き申す間敷き事。附けたり、年長に候ふ者へ相対を以て親・兄より頼みこれ有

るとも、手あらき儀いたすまじく、捨置き難き事これ有り候はゞ、理解申し聞き、其の上にも相用ひず候はゞ、員長え申し達し差図にまかせ申さるべき事。(第15条)

教員や生長をはじめ年長の塾生が申し合わせて決めたことに反してはならないとあり、合議に基づく運営がなされていたようである。塾生の父兄から塾の年長者に直接依頼があっても「手あらき儀」(体罰や暴力行為か)を禁止している。捨てておけないような重大な事については、説諭して改善されなければ員長に報告し、その指示に従うこととされた。

(9) 争いの禁止と幼年者への配慮

- 一 塾中は申すに及ばず、途中におひても争論ヶ間敷き儀、かたくいたす間敷く、若し心得違いにて物争いたし掛り候とも取り合わず、員長えその趣申達さるべく候。附けたり、友達を待合ひ大勢にて往来無用に候。尤も幼年の者、雨天の節は年長の者世話いたし帰り申さるべく候。年長に候者行儀宜しからず候得ば、幼年の者見習ひ不行儀に相成り候間、万事相慎み幼き者をいたはり、机等出し兼ね候者えは世話いたし遣はさるべく候。(第16条)
- 一 手本の認め様、又は流儀の善悪を論じ申す間敷き事。(第19条)

塾の中や登校途中でも争論を堅く禁じ、心得違いのため争いを仕掛けられても取り合わず、員長へ報告することとしている。友人を待つて多数で往来することを禁じており、多人数で行動する(徒党を組む)ことを忌避した近世権力の在り方が表れている。雨天時に幼い者を世話して一緒に帰ったり、机を出せない者を助けるなど、万事幼き者をいたわることとしている。しかし、年少者は年長者の行儀を見習うので、年長者は行動を慎むように求めている。

また、書学に関しては手本の書き方や流儀について論じることを禁じている。指導法や流派の違いによる争いを避けるためであろう。

(10) 課業簿への記入

- 一 書学課業簿え自筆にて名前認め申すべき事。

幼少にて認め兼ね候はゞ、年長に候もの認め遣はし申すべし。前後をあらそひ申す間敷く候ふ事。(第18条)

出席した時は課業簿へ自筆で署名することになっていたが、年少者の場合は年長者が代筆することが許されていた。ただし、その際に先を争うことは禁止されていた。

(11) 物を大切に

- 一 都て筆・墨・紙、放埒に遣ひ、楽書等無用の事。附けたり、手本は勿論、師匠の加筆これ有り候清書など、縦ひ不用の品たりとも^た僂末に致さず、反古に至る迄決して費え成る儀いたす間敷く候事。(第20条)

質素儉約を旨とし、落書きなどをしたり、学用品を無駄遣いすることを戒めている。

(12) 座席

- 一 座席の儀、一ヶ月毎に繰り替へ、世話人中え居り見渡す持ち場の者、世話致すべき事。(第22条)
- 一 講義・会読等、兼て定置き候ふ間、一組つゝ順々に退散の事。(第23条)

教場の席替えは一か月に一回行われた。講義や会読(書物を読み合つて内容や意味を研究し、議論すること。ゼミナールのような授業)でも席が定まっていた。

(13) 防火

- 一 火の元、常々大切にいたし申さるべき事。(第25条)

言うまでもなく防火について注意を促している。

以上の25の条文の後に、東塾・西塾書學員長の名で、これらの趣旨を堅く守り、もし心得違ひの者がいた場合は奉行へ報告し、相当する咎を申し付けるので、油断なく心掛けるように申し渡している。

なお、文中にしばしば「員長」が登場するが、前に示した「成徳書院職掌記」の「職名位次」[図2]では、東塾・西塾の教職員として員長を見ることができない。しかし、第3条に「塾長並びに員長」と

あるので、塾長とは別に員長がいたことは確かである。「両塾諸生心得書」が「書學員長」から出されているので、両塾のそれぞれに附属として置かれた礼節・書学ごとに員長がいたことがわかる。篠丸頼彦作成の表「東塾・西塾の師役」には、書学・礼節の員長がみえる⁸⁾。

6. 結語

佐倉藩士の家に生まれた津田仙は英学者・農学者であり、最初的女子留学生で津田塾大学の創立者として知られる津田梅子の父である⁹⁾。彼は佐倉で過ごした少年期を回想して、手記で次のように述べている。

城門の内外に東塾、西塾の二つの学校を設け、藩中の子弟の城門の内なるものは西塾に入り、外なるものは東塾に入り、十五歳になれば、其の内の有志は温故堂に入るなり。東西両塾は小学にして、温故堂は大学なり。東西塾に各々百人許りの生徒ありて、十人を一組となし、生長一人づゝ置く。余十三にして生長となりし故、身体最も小さく『こまめの生長』と綽名せられたり¹⁰⁾。

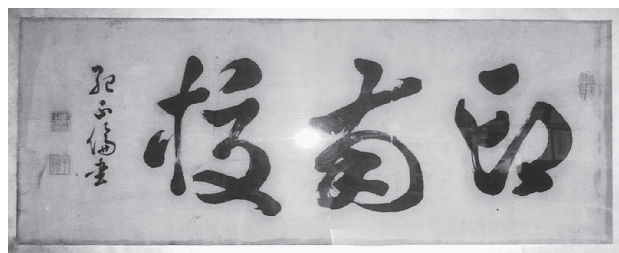
仙の記憶は前章までの内容とよく一致し、「東西両塾は小学にして、温故堂は大学なり。」という一節も、東塾・西塾が温故堂で学ぶための初等教育機関であったことを的確に示している。また、生長が塾生10人のリーダーであったこともわかる。このグループは、会津藩における^{じゅう}「什」、薩摩藩における^{ごちゅう}「郷中」と同様な、年少者から年長者までの異なる年齢の子どもたちが共に学び、成長する場であったと考えられる。

明治維新、廃藩置県を経て周知のように1872(明治5)年の学制公布によって近代的な教育制度が発足し、新たに初等教育機関として小学校が設立された。

しかし、東塾・西塾は幾多の変遷を経て、現在の佐倉市立佐倉小学校となっている¹¹⁾。成徳書院の本体は旧制中学校となり、戦後の学制改革によって高等学校となったが、東塾・西塾が小学校となったことは、初等教育機関としての在り方をそのまま継承していると言えよう。

また、幕末の1863（文久3）年から江戸詰めの藩士が佐倉に引上げると、城下に収容できない藩士たちのために、将門町・江原台・飯野町に武家屋敷が造成され、入植・開拓が行われた¹²⁾。これらの城外武家屋敷に居住する藩士子弟のための初等教育機関として、1865（慶応元）年に「郷校」が開校した。将門校は最終的には佐倉小学校に合併されたが、江原校は印南小学校、飯野校は内郷小学校となっている。印南小学校には最後の藩主堀田正倫の揮毫した扁額「印南校」が残され〔写真〕、内郷小学校の校歌には「歴史は古き藩校の 学びてここに百余年」と謳われている^{注13}。

このように藩校の初等教育部門が小学校となって新たな教育の普及に貢献していくという経緯は、佐倉藩の城下であった佐倉地域の大きな特徴と言えよう。



〔写真〕堀田正倫書扁額「印南校」

佐倉市立印南小学校蔵

注

- 1 順天堂の蘭方医が藩校医学所の教官を務めた。佐藤泰然が佐倉城下に開いた医学塾順天堂が順天堂大学の前身である。順天堂大学175年史編纂委員会編集『写真で見る順天堂史 175年の軌跡』学校法人順天堂、2014年等を参照。
- 2 請西藩（木更津市）は佐幕派として抗戦したため1868年5月に廃藩とされ、大網藩は1871年2月に龍ヶ崎（茨城県）に移った。
- 3 成徳書院職掌記「職名位示」の記述による。『日本教育史資料』第1冊所収。出典は注9を参照。
- 4 1839（天保10）年の「成徳書院心得書」の記述による。『日本教育史資料』第1冊所収。出典は注9を参照。
- 5 1831（天保癸卯）年「増補温故堂規則」には「御領分町在の者入学仕り候ふ節」の規定がある。『日本教育史資料』第1冊に所収。出典は注9を参照。
- 6 佐倉藩の年寄役（家老）の執務日誌である『年寄部屋日記』（日産厚生会佐倉厚生園病院所蔵・佐倉市寄託「下総佐倉藩堀田家文書」）の天保5年4月16日条、同29日条。篠丸頼彦編『校史 千葉県立佐倉高等学校』前篇、千葉県立佐倉高等学校、1961年のp.27を参照。河内駒之助は儒者である。外山信司「佐倉藩の積奠について一二つの『積奠儀略』と堀田正睦―」『佐倉市史研究』23号、2010年を参照。兼松繁蔵は佐久間象山の弟子で西洋砲術家。高島秋帆の徳丸ヶ原での砲術演習にも参加している。
- 7 『年寄部屋日記』の天保5年11月2日条。前掲『校史 千葉県立佐倉高等学校』前篇p.27を参照。
- 8 『千葉県教育史 巻1』（文献4）のp.196、『佐倉市史 巻2』（文献4）のp.874に東塾で「一般の子弟」が学ぶことが記されているが、その典拠は明らかではない。
- 9 臨川書店から1969年に復刻され、本山幸彦による解説が付される。文部省『日本教育史資料』京都、臨川書店、1969年を参照。
- 10 佐倉藩についての記載は82頁に上るが、例えば古河藩は2頁、水戸藩でも14頁である。
- 11 フランス語を学び、陸軍・大蔵省・農商務省・文部省に勤務して内閣賞勲局書記官となった。五十嵐重郎編輯『房総人名辞書』千葉毎日新聞社、1909年（復刻は国書刊行会、1987年）による。
- 12 平野知秋（重久）は1847（弘化4）年に成徳書院総裁、1869（明治2）年に佐倉藩大参事となる。著作に『佐倉藩雑史』（「佐倉市史料 第1集」佐倉市、1981年

として刊行)がある。依田柴浦(貞幹)は漢学者として知られる依田学海の兄で、学海は藤井善言の義理の兄弟に当たる。

- 13 山下豊作詞・寺内昭作曲, 1979年制定。

文献

- 1) 文部省. 幕末期の教育. 学制百年史. 東京, 帝国地方行政学会. 1981. (オンライン)
<http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317577.htm>. (参照 2018. 10. 1)
- 2) 細谷俊夫他編. 新教育学大事典. 東京, 第一法規出版. 1990; (5): 538-540
- 3) 滴草充雄編. 鹿山文庫目録. 千葉県立佐倉高等学校. 1971, 鹿山文庫整備委員会編集. 温故知新 鹿山文庫解説書. 千葉県立佐倉高等学校藩校創立二〇〇年記念事業実行委員会. 1999
- 4) 福井助治. 近世藩校に於ける学統学派の研究 上. 東京, 吉川弘文館. 1969
第5章 藩立学校(下総国)下. 千葉県教育史. 千葉県教育会, 1936; (1)
平井孝一. 序章 房総近世の教育. 千葉県教育百年史. 千葉県教育委員会. 1973; (1)
篠丸頼彦. 第12章 藩校と文化. 佐倉市史. 千葉, 佐倉市. 1973; (2)
- 5) 注9及び(前掲)佐倉市史. 1973; (2); 875—876
- 6) 千葉県立佐倉高等学校. 校史 千葉県立佐倉高等学校. 1961(前編); 27—28
(前掲)佐倉市史. 1973; (2); 869—870
- 7) 外山信司. 千葉県立中央図書館所蔵『積奠儀略』について—佐倉藩積奠資料の紹介—(一・二). 佐倉市史研究. 佐倉市. 2006・07; (19・20), 同. 西尾市岩瀬文庫所蔵『積奠儀略』について—佐倉藩積奠資料の紹介—. 佐倉市史研究. 2008; (21)
- 8) (前掲)佐倉市史. 1973; (2); 901—902
- 9) 高崎宗司. 津田仙評伝—もう一つの近代化を目指した人. 千葉, 草風館. 2008
- 10) 吉川利一. 津田梅子. 東京, 婦女新聞. 1930, / 東京, 中央公論社. 1990
- 11) 篠丸頼彦. 第5章 教育制度の発達. 佐倉市史. 佐倉市. 1979; (3); 862—865
- 12) 岩淵令治. 新興武家地の誕生—幕末期の佐倉江戸詰藩士の移住をめぐる—. 佐倉市史研究. 佐倉市. 2010; (23), 戸石七海. 新興武家地と近代—飯野町熊谷家文書の分析を中心に—. 佐倉市史研究. 佐倉市. 2015; (28)

〔補注〕

「両塾諸生心得書」は『伴宮公共録 利』(前掲「下総佐倉藩堀田家文書」)に所収される(土佐博文. 旧侯爵木戸家資料のなかの桂小五郎・山尾庸三の佐倉来訪回想文書. 千葉史学. 千葉歴史学会, 2018; (73) 参照)。『伴宮公共録』は近世末の成立で、『日本教育史資料』よりさかのぼる。大谷貞夫編『マイクロフィルム版 下総佐倉藩堀田家文書 解説目録』東京, 雄松堂フィルム, 1989に史料名が掲載されている。佐倉市史編さん室からマイクロフィルム紙焼きの提供を受けた。

Abstract

Elementary Education in the Sakura Domain School: Focusing on Its Tohjuku and Sehjuku School

Shinji Toyama^[1], Yoshiko Takano^[2]

[1] Chiba Prefectural Yotsukaidou Senior High School

[2] Faculty of Development and Education, Uekusa Gakuen University

The *hanko*, or Japan's feudal domain schools, was built to educate children of feudal retainers or warriors, and would play a vital role for education in the country's early modern age, together along with private schools and *terakoya* or temple schools. Following the Meiji Restoration, modernization and the development of education occurred during the modern age. Given the challenges of educational reform today, it would thus be meaningful to review the education in the early modern age, which should be honored as the prime point of modern Japanese education.

This study examines the *hanko* of the Sakura Domain in Shimousa Province. The *hanko* was established by Masaari Hotta in 1792 (Kansei Era 4), and Masayoshi Hotta expanded the *hanko* as part of the feudal domain's political reforms and renewed it under the name *seitoku shoin*. The education was based on neo-Confucianism and the military arts, Western subjects, such as *rangaku*, or Dutch studies, and *eigaku*, or the study of the English language as a means to acquire Western knowledge, were incorporated in the program. While the *hanko's* programs were meant for the children of feudal retainers or warriors from the ages of 15 to 24, there have only been a few descriptions regarding its education for younger age groups with no depth analyses introduced.

Hence, this paper explores student-guidance books from two schools, Tohjuku (or East) and Sehjuku (or West), which were educational institutions where children of the feudal retainers and warriors from ages 8 to 14 studied. This study looks into the Sakura Domain as an example, by investigating its *hanko's* elementary education.

Keywords: *hanko*, the elementary education, *seitoku shoin*, the Sakura Domain, the early modern age